

京丹波町住民自治組織によるまちづくり検討委員会 第8回会議

日時 平成19年6月21日午後7時30分
場所 和知支所会議室
出席 15名(欠席1名)

1 開会

2 あいさつ

委員長・今まで研修やグループワークなど検討を重ねてきた。今回、その内容を基にして報告書の素案を作成した。これを基にさらに検討を深めていきたいと考えているので、よろしくお願ひしたい。

3 議 題

住民自治組織によるまちづくりのあり方

※住民自治組織によるまちづくりのあり方(案)を基に検討を行う。

※報告書 3協働のまちづくりまでの項目について検討を行う。

※3グループに分かれて検討を行う。

4 その他

(1) 町内地域振興組織情報交換会の開催結果報告

平成19年6月19日午後7時30分～9時30分 瑞穂支所会議室

事務局・この会議の趣旨は、振興会の取り組み内容と方針をお聞きするという事と、組織間の情報交換を目的に実施した。

検討委員会からは委員長、副委員長に出席いただいた。

委 員・会議の様子はどうであったのか。

委員長・五つの振興組織の会長や副会長が出席された。新たな取り組みなど情報交換が行われた。それぞれ地域に応じた組織の形態を取られているということ、あまり無理な活動をされていないということ、地域の活性化のためいろいろと考えておられるということをお聞きした。

私のほうから、地域住民の全戸を会員にすることについて、また、会費の徴収について質問をした。地域の全戸を会員としている組織、各種構成団体の役員を会員としている組織とあったが、各種団体の役員を会員としている場合であっても、組織の構成団体に地域住民が関わっているため、結果的には、地域住民を対象とした組織であるということであった。

事務局・今まで、地域振興組織の交流は行われておらず、今回始めてのことであった。

それぞれ、取り組みの情報を報告いただいたが、それだけで1時間以上かかり情報交換の時間が少なくなってしまった。こういった交流を重ねていくことで、より交流が深まっていくものと考えてる。

検討委員会の取り組みに対して、地域にあった組織づくりを基本とすべきであるのご意見があった。検討委員会においても、そのことを基本として検討いただいている旨を報告した。

委員・・・この会議を実施されたということは非常に良いことであり、この会議の内容は非常に大事である。

(2) 町広報紙 (No 20 6月号) について

事務局・・・検討委員会の取り組みをできるだけ町民の方に周知すべきという検討委員会でのご意見もあったが、今回、今月発行の広報京丹波「シリーズ地域自治のススメ」で検討委員会第7回会議までの取り組み内容を紹介した。

5 閉会

副委員長・・・本日は、報告案の「協働のまちづくり」まで検討をいただいた。引き続き次回もよろしくお願ひしたい。

次回会議

開催日：7月19日（木）午後7時30分から

会場：瑞穂支所会議室

日時 平成19年6月21日午後7時30分

場所 和知支所大会議室

1 時代背景

2 地域等を取り巻く現状と課題

3 協働のまちづくり

<グループ構成員>

委員：藤田委員、岡本委員、堀林委員、和田委員、吉田委員長

事務局：田端、野村

(計7名)

- ・あまり文章が、難し過ぎるのもどうかと思う。みんなが読んで、分かるような報告文にしなくては何の意味もなく、多くの人に理解してもらうには、できるだけ簡単でみんなが分かり合えるような文面にする必要がある。
- ・どこまでつめて、報告・答申とするものなのか、おとしどころも、どのあたりまでが必要なのか心配である。
- ・瑞穂は、財産区が元になって振興会が動いているので、このまちづくりの観点からは切り離して考えるべきであり、意味合いも少し違うような気がする。しかし、すり合わせる点も多いと思う。
- ・アウトライン的なもので、示していけばよいのではないだろうか。
- ・固定観念で、縛るようなことはよくないと思う。
- ・転入者が増えて人が増えるのはよいが、団地形成がなされ肥大化したら、旧家は高齢化で限界に近づくので、協働のまちづくりには程遠いとんでもないことになる。
- ・協働のまちづくりに条件設定をして、文章にも入れておく必要があると思う。
- ・田舎のわずらわしさを嫌う人が多いだけに、あまりきつく縛れないと思う。そこが難しい。
- ・転入してきた人とは、どちらも構えてしまうので、溶け込むのに数年の歳月及び時間がかかる。
- ・しかし、人がいないとまちづくり・地域づくりはできないし、協働はありえない。
- ・滞留するものがないと多くは望めない。施策として、魅力的な交換条件的なものがないと定住してもらえない。プレゼンテーション的なものが必要になってくる。
- ・きれいな言葉だけを並べるのではなく、何かを定義するようなものがほしいと思う。
- ・定住計画・施策を示すべきではないか（……これは、総合計画で示していく）。
- ・そのためにも、振興会が支援窓口になっていけばよいのではないか。
- ・転入の際、ある程度の条件設定をしていく必要があると思われる。
- ・「いきいき」という言葉を、文章にも活かす必要がある。
- ・また、環境にやさしい・住みやすい住環境を活かした力を感じられるように、文章に反映させたほうがよいのではないか。

- ・ 高速道路ができて、単なる通過点とならないように、魅力あるまちづくりが必要となってくる。
- ・ 文章の中に、もっと図を入れて分かりやすく引きつけるように、文章の構成を考えるべきである。
- ・ 都会から人を定住させるには「ここまでこの町がしてくれるなら」というものが必要。
- ・ 木材を使って物を作る人に援助する。定住促進につながる。しくみづくりが大切であり、理想論だけでは人は住まない。
- ・ 文言のみだけでなく、例をあげることも大切である。
- ・ 地域の相談役となる人材が必要。その人を通じて役場に相談したりすることで問題解決できる。
- ・ 委員会として提案ができるようにしたい。

日時 平成19年6月21日午後7時30分

場所 和知支所大会議室

1 時代背景 2 地域等を取り巻く現状と課題 3 協働のまちづくり

<グループ構成員>

委員：野間委員、山西副委員長、西田委員、上田委員

事務局：片山、久木

(計6名)

- ・ 何をやろうとしているのか、みんなにビジョンを示せるような報告にしないとけない。取り組み方がわからない。
田畑荒らさないように、景観を守っていくという観点が必要である。
区内にも多くの組織があるが、横の連携が必要だ。
振興会のよいところを守っていこうという意識を持たなければならない。
- ・ 日本の近代化の中で政治が人を農村から引っ張っていった。
そのことをおさえてこなかった政治の責任、この現実を行政も地域もしっかり把握してこなかった。
- ・ 以前、H区は山を守ることで財源確保をしっかりと、皆から負担いただくことなく地域が守れた。負担しあうだけでなく方法はいっぱいある。
- ・ 以前はそれぞれが意見を闘わせていたが、最近は避けてきた。闘わないと先行きしなかったが職に就いて「うちだけ何とかならいい」という意識になってきた。
- ・ 責任を持つ発言をしないと、めざす組織も立ち上がらない。危機感をもたねばならない。
- ・ ふるさとで育っていないとふるさとと思わない。
- ・ 地域の拠点に祖父祖母がいたら孫が帰ってくる。
- ・ 「農業ではメシは食えない」とあおりすぎた面もある。
- ・ 帰農、Iターンも考えられるが、自立できる収入確保の道を作らないとダメだ。
- ・ 自治組織といっても、労力もカネも負担になる組織は難しい。錬金術をしっかりと作らねばならない。
- ・ 質美の取組みは、道路の課題からスタートしてその他の課題に移っていった。
- ・ 国民年金だけの家庭にとっては大きな負担となる。
- ・ 何に取り組むのか具体的にする必要はある。
梅田の取組みは、梅の視察をしてきた。梅だけにこだわらず里山づくりを進めたい。
遊休地をどう守っていくか？いくらかの収入の得られる取組みが必要だ。
- ・ 村の中で合意が得られる取組みでなければならない。時代の流れだけでは合意が得られにくい。
- ・ 人口が減ると負担大きくなる。少しでも他の手立てで埋めていけるようなわかりや

すい村づくりが必要。

- 課題解決型で議論してきたが1つのテーマをすることによって課題完結型に
- マイナス面に対応するばかりでなく、誇り、やりがい、生きがい生まれる取組みも必要。
- 集落機能の維持は農地を守らないとできない。荒廃しては人住まない。
- 集落ではあってもブロックで共通認識持てるか？
- 具体的なものできるか？「これをしたら」と言うものがない。
- 「こういうものをしたら」という引っ張るものがないと先行きしないのでは。
- 区長になり手がなし。区長は地域のことだけに携わってもらって、ビジョンは振興会的なもので、振興会に組織を広げていくと人材もあるのでは。
- 集落の連合体で区長の業務を受ける。
- 結局、昔のあり方に変えていく方向→自分らのことは自分らでしようという方向に。親が子に意識付けしていない。伝えていない。
- 魅力ある組織づくりが必要だ。
- 昔の人が取り組んできたことを真剣に考えていかないといけない。
- 右肩上がりのときは地域力に余力があった。これからは、地域としてどうして行くかを考えていかないといけない。地域に認識伝える知識人おられるか？
おられる→必要性がわかる人ある→若い人に遠慮している→これではダメで大切さを訴えていかないと
- 区は1軒1人の参加で若い人の意見が反映しない。ご意見番の意見も反映しない。
- 地域の因習を変えていこうとする場合、家庭内に伝わっていない。
- 複層的に交流できる仕組み必要だ。
- 意識改革できるかが、カギだ。

日時 平成19年6月21日午後7時30分

場所 和知支所大会議室

1 時代背景 2 地域等を取り巻く現状と課題 3 協働のまちづくり

<グループ構成員>

委員：太田委員、山内公夫委員、小森委員、上林委員、白樫委員

事務局：小谷、小原

(計7名)

- ・ 地域の現状は、人口減少、財政難である。
- ・ 若者は都市部に出て行ってしまふ。
- ・ (「補完性の原則」の話の中に関連しての発言。) 区内では、身近な助け合いの場は隣近所であるため、隣近所仲良くしてほしいと呼びかけている。
- ・ 規模の大きい区では、転入された地域では道づくりに参加されないなど、今までのやり方が通用しないことが生じている。
- ・ 地域内に、大きな自治会があるが、共同で活動はなかなかできていない。
- ・ 地元の地域振興会では会費を徴収しているが、不満の声を聞くこともある。
- ・ 時代は変わったという話の中で、若者が変わったということが出てくるが、今まで活躍してきたリーダーも高齢化し、その人が声を発したらリーダーとして引っ張っていかないといけないが、高齢でその元気もなくなってきている。
- ・ 組織のあり方については、モデル図や規約の例などを提示することで、より具体的にイメージしやすいのではないか。
- ・ 報告書(案)1時代背景で、「時代は変わり」とあるが、「変化」という表現が良いのではないか。
- ・ 2地域等を取り巻く現状と課題の最初に、「少子高齢化等」とあるが、「過疎化の進行」も重要な問題であるので「少子高齢化、過疎化等」としてはどうか。
- ・ 地域で活動されている加工グループも高齢化や人材不足により、経営が困難となつてきている。広域的な組織で取り組んでいくことも良いのではないか。
- ・ 地域振興組織においては財源確保が重要であり、会費ということも必要であるが、お金を生む活動も重要である。
- ・ 人材育成が大事であり、年齢に関係なくいろんな人に関わってもらうことが大切。
- ・ 地域主体で活動を起こすときでも、公募委員などを取り入れるべき。
- ・ この検討委員会の内容をいろんな人に伝えたいが、まだ、方向性が見えないので伝えにくい。

住民自治組織によるまちづくりのあり方について

報 告

— 目 次 —(案)

- 1 時代背景
- 2 地域等を取り巻く現状と課題
- 3 協働のまちづくり
- 4 住民自治組織について
 - (1) 趣旨
 - (2) 住民自治組織の役割の明確化
 - (3) 既存の住民自治組織
 - (4) 組織（区域）の範囲
 - (5) 組織体制
 - (6) 自主財源の確保
 - (7) 支援のあり方
 - (8) 活動拠点
 - (9) 志縁団体との連携
- 5 組織化に向けて